



フシクブ 星窪

星窪（フシクブ）とは、むかし、山に星が落ちて穴があいた、いわゆるクレーターのこと、古くは「遺老説伝」にも記録されています。

かつては縦13m、横20m、高さが3mほどの窪地でした。周りの田んぼへの貯水池として使われていたり、サトウキビを絞るための水車を動かす動力源になっていたという記録があります。

フシクブの場所：クイナ展望台

辺戸岬

の駐車場の近くに星窪はありますが・・・現在は道路工事によってつぶされてしまい、ヘリの一部のみが残っている状態です。

クイナ展望台とは？
その名の通りヤンバルクイナの形をした展望台のこと。辺戸岬からよく見えます。

むりかぶしは一般的に、「プレアデス星団」と呼ばれている星の集まりのことです。

石垣島では天の真上を通る星として親しまれ、民謡や民話にも取り上げられています。

沖縄だけでなく、日本各地や世界でも有名な星で、清少納言の「枕草子」にも「星はすばる」とあります。また、石垣島天文台の望遠鏡にもこの名前がついています。

むりかぶしの話

むかし、八重山では重い年貢が取り立てで農民たちが苦しめられていました。これを見かねた天の王様が、北斗七星に「お前が島を治めなさい」と言いましたが、北斗七星は「わたしにはできません」と言って断りました。次に王様は南斗六星に「お前が島を治めなさい」と言いましたが、南斗六星も「わたしにはできません」と言って断りました。

怒った王様は北斗七星と南斗六星を北と南に追いやりました。そのとき、むりかぶしという小さな星の群れが「王様、その仕事をわたしにやらせてください」と名乗り出ました。「小さなおまえに島をおさめることができるのか」と尋ねると、「きっとやってご覧にいます」とむりかぶしは答えました。「それでは島がよく見えるように、天の真ん中を通りなさい」と言いました。

それからむりかぶしは天の真上を通るようになり、人々はそのむりかぶしを観察して農業を行うことになったということです。

星見石(ほしみいし)

星見石とは、まだカレンダーがない時代に農作業の時期を知るための星の観測に使われていた石のことです。主にプレアデス星団（和名：すばる 方言名：むりかぶし）を観測していたと伝えられています。



星見石には、方位石（ひだり）と立石状（みぎ）の2種類があり、立石状のものには穴が開けられたタイプと穴がないタイプがありました。石垣島や竹富島で主に使われていましたが、首里で使われていた記録も残っているようです。

那覇

立石状(穴あき)
の星見石

石垣島

西表島

むりかぶし
(プレアデス星団)

はじめに

むかしむかし、琉球では、星と深いかわりがありました。今のように、時計やカレンダーがなかったのです、人々は夜空の星を使って暦（こよみ）を決め、生活をしていました。

ここに書いたおはなしが、みんなから忘れられないように、なくなってしまうないように、このパンフレットを作りました。

☆ ニヌファブシ（北極星）の由来

ムカス、ビゲーは、早くなくなって、ブネーと暮らしているキョーデーがいたそう。弟は、よく働き、ブネーを大事にした。兄は大変なまけ者で、ブネーが困っていても、知らんぷりで遊んでばかりいた。

ブネーが病気になると、弟はいっしょうけんめい看病した。兄はいつものように遊んでばかりいた。ブネーが病気で死んだとき、弟は悲しんで、仕事を手につかなかった。

「お兄さん、今日はブネーの墓参りの日だから、一緒に来てね。」

「また墓参りか。いやだなあ。しかたがないから、今日はいっしょに行ってやるが、次からは、お前一人で行けよ。」

兄はしぶしぶ、弟と一緒に墓参りに行った。弟がブネーを思い出して泣いていると、いつのまにか、墓のそばに、これまで見たことがないおばあさんが立っていた。「そんなにブネーに会いたいのかね。そんなら私が会わせてあげるよ。こっちに来なさい。」

おばあさんは、キョーデーをカーラのそばに連れて行った。そのカーラは、これまでキョーデーが見たことがないカーラだった。カーラは、向こう岸が見えないほど広く、水はごうごうと渦を巻いて激しく流れていた。

「さあ、ここだよ。このふねに乗りなさい。」

見ると、川岸に小さなふねがつないであった。

「このふねをキョーデーでかいっぱいこいで、向こうの岸に着いたら、ブネーに会えるよ。だけど、一人の力では、流れに負けるからね。キョーデーが力を合わせてこぐんだよ。まず私から乗るからね。」

とおばあさんは、そのふねに乗った。キョーデーも続いてふねに乗った。キョーデーは、そのおばあさんをふねに乗せていっしょうけんめい、かいをこいだ。けれども、いくらこいでもカーラの流れが強く、ふねは少ししか進まなかった。

遊んでばかりいる兄は、すぐにつかれて、こぐのがいやになった。

「いくらこいでも、向こうの岸には着かないじゃないか。おれはもうやめるよ。」

「ブネーに会えるんだからがんばろうよ。」

「死んだブネーに会えるもんか。」

兄はこぐのをやめてふねの中でねてしまった。

弟はブネーに会いたい一心で、こぎ続けた。うでもこしもちぎれるほど、痛くなった。それでも弟はこぎ続けた。しかし、幼い第一人の力では、激しい流れに、ふねはどんどん流され、やがて、ふねはごうごうと水が落ちる大きいたきの近くまで、流されてしまった。兄はもうぐっすりねむってしまって、そんなことは知らなかった。どんどんふねがたきに近づいても、おばあさんは知らんぷりをしていた。弟は、このままでは、三人の乗ったふねがたきに落ちるので必死にこいだ。とうとうふねはたきから落ちそうになった。弟は思わずさげんだ。

「たきに落ちるよ。ああ、ブネー助けて。」

それまでだまってふねに乗っていたおばあさんが、弟をさっとだきかかえた。すると、おばあさんは弟をだいたまま、ふわっと空中に浮かんだ。ねむった兄を乗せたふねは、まっさかさまに、たきつぼに落ちていった。

おばあさんは、気をうなった弟をだいたまま、どんどん天高くのぼって行った。やがて、北の星座がきらめく空のかなたにたどりついた。おばあさんは弟の顔を見ながら言った。

「あなたは、りっぱな子どもだ。だから、あなたは、世の中の目当ての星になりなさい。」

こうして、弟は天にのぼって、みんなが目当てにするニヌファブシになった。

※ムカス:むかし

※ビゲー:おとうさん

※ブネー:おかあさん

※キョーデー:きょうだい

※カーラ:かわ

「おきなわの民話」より抜粋



撮影：石垣島 2017/8

この話は「おきなわの民話」
文・遠藤庄治発行・NTT沖縄支店
から抜粋しました。

ここまで読んでくださりありがとうございます。おもしろいな、もっと知りたいな、と思ったところがあればぜひ自分でも調べてみてください！

このパンフレットは、平成30年度「地域共創型学生プロジェクト（以下、ちゅらプロ）」で採択された、星の民話採集プロジェクト「ふしぬゆ※」より、作成されました。

ちゅらプロとは、琉大生が自ら「地域」に入り、地域の再生。活性化やそこでの課題の発見・解決等に取り組む「公募型の正課外プロジェクト」です。

※ふしぬゆ:沖縄の方言で「星の夜」

協力：沖縄伝承資料センター
辺戸区公民館

絵：はやのん理系漫画制作室

発行：「ふしぬゆ」/琉球大学理学部

長嶺実来・品川玲央

発行年月日：2019年2月28日



沖縄の星の文化

